

平成 25 年度「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告（第 2 回）
「一緒にテーマを考えよう」

2013 年 6 月 10 日（月）18:30～20:00 大阪検査相談・啓発・支援センター「chotCAST なんば」
出席者 16 名

開会あいさつ（公益財団法人エイズ予防財団 白阪琢磨理事）

このプロセスは、現場で一緒にテーマを考え、厚生労働省へ提案していきたいということで始まった。まだ完成形ではなく途中段階だが、それぞれの立場で意見を出していただきたい。一緒に考えていくことが非常に大切だと思う。エイズの流行はますます危機的な状況にあると認識している。

趣旨説明（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

- ・5月24日に開催した東京フォーラムの要約とAPI-Netに寄せられた意見紹介
- ・平成24（2012）年エイズ発生動向について（厚生労働省エイズ動向委員会報告）
- ・議論の参考にHIV/エイズ分野でこの1年ほどに起きた出来事を11項目ピックアップした（資料1）
- ・厚生労働省が主唱する世界エイズデーキャンペーンのテーマをエイズ対策の現場の意見を反映したかたちで提案したい。フォーラムはその最初のステージで、東京に次いで今回は2回目となる。
- ・エイズ対策の現場の声を聴き、それを踏まえてテーマを策定する目的で3年前、自発的にフォーラムを開き、厚労省にテーマの候補案を提出した。現在は厚労省の事業の中にそのプロセスが位置づけられるようになっている。フォーラムは一足飛びにテーマを決める場というよりは、エイズ対策の現状はどうなのか、どういうメッセージを伝えたらよいのかといったことをのびのびと議論していただき、そこから基本的方向性を見定める場にしたい。東京・大阪の2回のフォーラムとAPI-Netに寄せられた意見を集約し、7月のテーマ検討会議で策定するエイズ予防財団の候補案を厚労省に提出する。自分たちの意見を国のエイズ政策に反映させる機会でもあるので活発な議論をお願いしたい。
- ・API-Netでの意見募集および過去3年間のテーマ紹介

ディスカッション

司会・進行（特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 長谷川博史代表）

改正エイズ予防指針は、全章に「NGOとの連携」という言葉が入っている。エイズ対策の中では、医療・人権・予防・ケア等いろいろな立場の人が対等に話せる関係でありたいという基本的な考え方がある。フォーラムは、いま何がエイズ対策の重要な問題で、何に取り組むべきかを議論する場としたい。そこで認識された課題がキャンペーンテーマとなり、いろいろな場面で展開されるだろう。プレーストーミングの場なので、他者の意見を否定するようなことのないようご協力願いたい。自分の立場や肩書はいわず、感じていることを自由にご発言いただきたい。また、ここで聞いた個人情報は外部に出さずこの場で留めていただきたい。お互いを尊重して、同じ土俵、フラットな立場で話し合いができればと思う。

参加者からは以下のような意見が出された。

【現場で感じる問題】

《性行動や関心の二極化》

- ・この数年、エイズ対策の予算が厳しくなっていることを痛感する。寄附も激減している。活動の継

続には、どうしても財源が必要だ。

- ・街頭キャンペーンで啓発グッズを配布してもあまり受け取ってもらえず、HIV 検査件数も伸びない。
- ・大きな事件があると関心がそちらに向き、エイズのように以前からある問題への関心が下がるのはある意味で自然でもある。切れ目なく関心を持ち続けてもらうにはどうしたらいいのか。
目を引くために何か仕掛けるといようなかたちでの関心のもたれ方は必ずしも歓迎できない。エイズ対策関係者にはそうした共通認識もある。どういう形で関心が高まったらよいのか。セックスは日常にある行為。日常の問題にはなかなか関心を持ってない面もある。常にではなくても、何かあったときには関心が向いてほしい。
セックスを日常の生活の一部としてとらえる考え方は重視したい課題でもある。
- ・HIV/エイズを自分のこととして捉えないのが問題ではないか。若い層の性行動は二極化し、セックスに関心を持たない人もいる一方、どんどんパートナーを変える人もいる。若者には、自分は感染しないという根拠のない自信を持っているようにも思える。エイズのことをしっかり考えようと呼び掛けた方がよいのか。それとも、パートナーを変えることに受検するくらい検診を一般化した方がよいのか。悩むところである。
二極化は重要な検討課題だろう。実は性行動は昔から二極化していて、最近是人それぞれでセックスの幅があってよいと認められるようになってきたということなのかもしれない。
- ・根拠のない自信や知識が邪魔をしている気もする。HIV に感染しても致命的な病ではなくなった、感染しても大丈夫というメッセージだけが一人歩きし、油断があるのではないか。セックスの低年齢化も気になる。ネットの発達で 10 代がセックスできる時代、しかもインスタントなセックスが増えている気がする。HIV や性感染症の情報がないので 10 代の感染が増えるのではないか。
知識は最大のワクチンと言われるが、では、正しい知識とは何だろうか。
- ・6 月の HIV 検査普及週間や 12 月の世界エイズデーの電話相談では、具体的なリスクがないのに、自分の不安や体調の悪さはエイズによるものではないかと悩んでいるケースが多い。関心を高め、リアルな不安を持つのはいいが、過剰な不安を持つのもどうかと思う。
「リアル」もキーワードの 1 つだろう。大きい話題があると瞬間風速的な関心は上がるが、不安を煽るなどマイナス要因もある。集中的に検査広報をかけたら感染リスクのない人が検査場に殺到し、パンクしてしまった例もある。関心と不安の関係はどうか。
- ・厚労省が行うキャンペーンは、HIV / エイズを健康問題に置き換えていく必要があると思う。感染が増えると医療費がかかるのも事実。禁煙やダイエットと一緒にされては困るという意見もあるが、死や恐怖という観点、あるいは医療の進歩をみても、健康問題としての方向付けが必要ではないか。死や恐怖のイメージが拭えないままキャンペーンを行えばリアリティはなくなる。誰をターゲットに予防を呼びかけるのが改めて大きな課題とを感じる。予防のメッセージは、実際にセックスをする人に届ける必要がある。セックスという言葉回避してはいけないと思う。
ターゲットや手法の明確化、健康問題への置き換えは重要な指摘だ。例えば国が禁煙やがん検診を推進するとき、背景には医療費負担を減らすという意図がある。しかし医療者がそれを発言すれば、エイズは金食い虫だと言わんばかりに聞こえるおそれもある。
- ・街頭キャンペーンで感じたことは、若者はコンドームを見て反応する一方、40 代～50 代の女性は私には関係ないという表情が多い。性行動の低年齢化への対応として学校教育で取り組む必要があると思うが、実施すると今度は行き過ぎた性教育と保護者側からクレームがつくことがある。若い世代に啓発するには、保護者や P T A も対象に考えないと進まないのではないか。
エイズに深く関わる人とそうでない人、キャンペーンはどこを対象にするか。これまでは一般国民と個別施策層の両方に展開できるものを選ぼうとしてきたが、全部ひっくるめるには限界がある。新しい視点として教育分野、医療職、福祉職等に働きかけるテーマでもよいのかもしれない。
- ・みんなが関心を持つようなトピックがなく、キャッチ ーなものを作り出すのが難しいと痛感する。国は HIV 検査の受検者数を増やすことを掲げており、それと連動させる必要も感じる。健康問題と

して置き換えるという意見に賛成。健康問題の切り口で何かキャンペーンができないだろうか。

- ・情報の提供はかなり進み、ネット上では量だけでなく質も優れ、個々のポータルサイトも出来ている。しかし、そこでも二極化が見られる。情報の存在すら知らない層はエイズでは死なないと楽観し、実際に陽性告知を受けると、明日にも死が訪れるようなショックを受ける。情報提供や啓発活動が進む一方でその情報が全く届いていない層が相当数いる。そこへどうアプローチするのか。情報提供が届く層と届かない層にかなりムラがある。エイズを死の病と捉える人はエイズから目を背ける傾向がある。一方で、死なない病気、大丈夫と考える人はその立場を正当化しようとする。エイズを健康問題、エイジング、医療や福祉の問題に置き換える等の質のシフトもある。
- ・10代～20代は健康問題よりも、モテるかどうかが（恋愛）とか美容に関心があると思う。女の子が喫煙を嫌うと男の子が禁煙するなど。30代になると健康問題も気になり始める。若年層は健康自認が強く、エイズを健康問題にすると訴求力に欠ける可能性がある。健康問題として捉えるのと健康問題として伝えるのとは異なり、戦略が必要だ。
- ・HIVの問題を恐ろしいものや複雑なものにせずに、もう少しライトにしたらどうか。結果的に、無関心を装っていた人が関心を持つ可能性もある。HIVのイメージを変えることで、関心を持っていない人、本来届けたい人、検査を受けてほしい人に上手くつながる発想がほしい。無関心を装うのは怖いからではないか。リスクがあるのに無関心を装っている人たちに働きかけることで、意識や周りの環境が変わっていくかもしれない。やはり教育が大切だと思う。出前講座やワークショップなど良い取り組みはあるが、セックスの問題が絡むだけに、ポスター等でキャンペーン展開してもそれほど効果的なものは出来ない。小・中・高で貼られるポスターをイメージしてテーマを作ろうとすると難しい部分がある。広く伝えようとするのではなく、対象層や期間の絞り込みをするのも1つの手法だ。
- ・介護施設や高齢者ケアをしている人に向けてキャンペーンを行ってもよいのではないか。
- ・国内全体で行うことを考えると、検査促進がよいのかなと思う。検査にフォーカスしていけば、自ずと正しい知識を伝え、興味や関心を高めることになるのではないか。検査は流行の抑止になる。では、検査がなぜ促進されないのか、ということも考える必要がある。怖いから行きたくないのではないか。検査は脅しで行かせるものではない。受検者数を増やす、増やさないという狭い範囲ではなく、どういう層が情報に触れていないのか、どういう層がどんな理由で検査に行かないのか、どういう層が検査に行くのかを話し合いたい。これまで、予防・検査を行っている人と支援を行っている人が別ルートでやってきた。両者が知恵を出し合えば、新しい考えが出てくるのではないか。更に言えば、予防・検査・支援を行っている人と当事者の声がつながるとよい。

閉会のあいさつ（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

API-Netでも意見募集をしているので、フォーラム参加者も言い足りなかったことなど、更にご意見をお寄せいただきたい。フォーラムとAPI-Netの意見を集約した上で、7月に2回、検討会議を開いて具体的な候補案を策定し、厚労省へ提出する。東京のフォーラム報告はすでにAPI-Netで公開している。本日の報告も公開する予定なので、是非ご覧いただきたい。

テーマの策定プロセスは常に試行錯誤の過程である。そのプロセス自体もキャンペーンの一環と認識していただき、来年のフォーラムではもっと参加者が増えれば有難く思う。

過去3年のテーマは、どちらかというとエイズ対策に何かしら関わっている人々にエールを送るものだった。少し方向転換した方がよいのか、今までの路線をさらに追求した方がよいのか、重ねて議論していけたらと思う。